

裏・表紙

皆様の、お心とお力を
私たちに傾けてください。
旧東伏見宮葉山別邸にお力をください。
皆様と共に
この別邸と葉山の町を
さらに夢のあるセンスにあふれた
国際情緒豊かな地域に
育て輝かせて行きましょう。

一般社団法人La Casa Blanca HAYAMA 理事一同

表・表紙

地域の「みんな」の力で守りたい！

葉山町に残る唯一の
皇族別荘「旧東伏見宮葉山別邸」は
大正3年に誕生した青空に眩しく輝く
白亜の洋風建築だった！

一般社団法人La Casa Blanca HAYAMA 理事一同

葉山町に残る唯一の 皇族別荘「旧東伏見宮葉山別邸」は 大正3年に誕生した 青空に眩しく輝く 白亜の洋風建築だった！

神奈川県三浦郡葉山町堀内。都心から電車や車で1時間程度、相模湾に面した陽当たりの良い穏やかな場所です。明治中期に葉山御用邸が造営され、その時期と前後して、皇族・華族や政治家、財界人、軍人、学者、文士などが別荘をつくりました。「別荘」ですから、少し奥まったところにひっそりとあり、その別荘だけに至る小さな道「こみち」が多いのも特徴です。海辺の開放感と静かさ。人々の生業と別荘の暮らし、それらが豊かに混在してきたのが葉山の歴史であり、「別荘文化」のある町なのです。そして時の経過は別荘の主が代わったり、取壊されて新たな宅地造成に変わったり、まちに残る「旧別荘」はわずかとなっています。残っていても、経年による修繕や維持管理など、持ち主の負担もままならない物となっていることも現実です。

葉山町にある唯一の皇族別荘、「旧東伏見宮葉山別邸」もそのひとつ。1914（大正3）年に東伏見宮依仁親王の別邸として竣工しました。親王はイギリスやフランスに留学後、海軍軍人として、横須賀鎮守府の初代長官も務め、海軍大将にまでなられた方です。三浦半島にも大変縁の深い方なのです。

この別邸は、木造2階建てで、屋根は銅板葺。緑青色がとても綺麗で、真っ白なドイツ下見板張りの外壁と素晴らしいコントラストを作っています。

風格ある外観に大きな窓と海を望むサンルーム（2階の西と北の廊下）が劇的な空間となっています。そこからは、江ノ島と富士山が見えるのです。

室内デザインは、シンプルに抑えられた西洋様式の室礼が溢れています。優雅と品格にあふれた洋館らしい空間です。

親王の没後も別荘として機能していましたが、戦後、日本国憲法により皇族の在り方が大きく変わり、この別邸はイエズス孝女会に引き継がれ、修道院・幼稚園として使われてきました。別邸は幼稚園の園庭に面してがあるため、園児や卒園児、保護者には馴染みの深い存在かもしれませんが、常に公開されているものではなく、葉山や逗子にお住まいの皆様にも「知る人ぞ知る」という建物でした。



地域の「みんな」の力で守りたい！

2017年には国登録有形文化財に指定され、今年で竣工110年。これまで、イエズス孝女会が苦労を重ねてなんとかここまで守り継いでくださいました。しかし、もうその努力も限界となりました。

建築は大きく老朽化し、木造の美しかった白色の外壁はすでに腐り、その内部の柱や土台まで腐食しています。大きな地震に襲われたら、大きく崩壊する状態なのです。また、木製の西洋窓も腐食してしまい、雨漏りが激しく、そのために構造材がひどく傷んでいるのです。

さて、この白亜の別荘文化のシンブルである建物、この維持管理は市民の力で進めなければ急速に消滅してしまいます。

そこで地元の別荘文化を後世に伝えるべく活動しているNPO法人葉山環境デザイン集団や建築の専門家、地元プレイヤーなどと手を取り合って、保存に関する寄付金の運用や資金調達、実際の保全を手掛ける団体（一般社団法人La Casa Blanca Hayama）が立ち上がりました。

この活動にはさまざまな視点があります。洋風建築の雰囲気を保った唯一の遺構をどのように活用するのか？現存する数少ない“かつて”の別荘の保全への「共感」を集めるにはどうすればいいか？保存活用につき物の「資金」をどのように調達するのか？

さらに、別邸の保存だけではなく、地域に現存する別荘に関連する葉山の文化をどのように伝えていったら良いのか？などなど。物の見方や視点を変えてみると、歴史だったり建築だったり、人々の生業であったり、深めることのできる要素がたくさん存在することに気づきます。さらに、建物そのものの維持だけではなく、使い継ぐ方法や手法も「先を見据えて」いなければなりません。

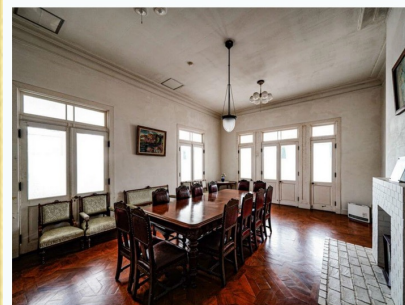
こうした悩みは、別荘建築や海軍の将校住宅、あるいは伝統的な住宅建築を抱えていらっしゃる方々に共通した課題ともなっています。

私たちはいま、施設公開やイベントなどの企画を通して、町内外の多くの方に関心を持ってもらえるよう、知恵を巡らせているところです。日常の中に別荘文化の“残り香”がある葉山町で、身近ながらも遠い存在だったこの建物が、普段の生活をちょっと引き立ててくれる——そんな場であり、そんな建物に向かって維持管理していきたいと切実に願っています。

皆様の、お心とお力を私たちに向けてください。旧東伏見宮葉山別邸に向けてください。

皆様と共に、この別邸と葉山の町をさらに夢のある、センスにあふれた、国際情緒豊かな地域に、さらに育てて行きましょう。

一般社団法人La Casa Blanca HAYAMA 理事一同



写真右は当時の様子。気品のある室内は100年以上経った今も変わりません



写真左は1階、右は2階のサンルーフ。当時は、ここからの景色をどのように見ていたのかな？そんな想像も



逗子は、東伏見宮依仁親王にとって療養の地であったようです。この建物が出来る前の明治43年にも逗子で療養していた記録があります。大正2年12月に風邪をこじらせ肺炎となり、熱海で1か月半ほど療養し全快すると、大正3年3月3日に船に乗って逗子（葉山）別邸に入っている事から、その頃にはこの建物も完成していたのでしょうか。3月17日には帰京し、3月23日に軍令部へ出勤。その後、3月26日に沼津で静養中の照憲皇太后へ御参伺するなど慌ただしい日々を送ったようです。

大正11年5月10日、再び葉山別邸で療養に入り、6月25日に重体となって同日14時にご容態を公表。26日20時頃に危篤に陥り、23時頃には絶望の状態。27日20時頃に周子妃と共に自動車に乗り、近隣住民に見送られながらこの別邸を出ます。赤坂・葵町の本邸にて23時25分薨去。7月3日5時30分から柩前祭が行われ、7時に陸海軍・儀仗隊の行列に伴われて豊島岡墓地へ向かい、7月4日8時に斂葬、7月5日に権舎祭、同日10時に墓所祭が行われました。周子妃は五十日祭に至るまで、雨が降っても毎日墓参していたとの事です。

引用資料／BROG美珍麗・探報【参考文献】「依仁親王」1927 東伏見宮家

地域の「みんな」の力で守りたい！ 今回の緊急工事概要です。

国登録文化財 イエズ孝女会修道院旧館（旧東伏見宮葉山別邸）の改修工事計画書 令和6年10月1日

一般社団法人La Casa Blanca Hayama代表理事 丸谷博男

■所有者
イエズス孝女会

■発注者・維持管理&利活用主体
La Casa Blanca Hayama
代表理事 丸谷博男



■緊急を要する建物外装の外装状況
雨水侵入による構造材の劣化緊急を要する現状を
改修し、建物を維持管理するために、有期で対応に
真出を行うと同時に、運営主体の独自企画を展開す
る。

旧東伏見宮葉山別邸

歴史的価値
・日本の近代化の象徴
・西洋の別荘文化の導入
・大正前期の建築技術としての価値
・大正前期の建築技術としての価値
・大正前期の建築技術としての価値
・大正前期の建築技術としての価値

現状の問題点
・躯体の劣化（土台、柱の腐敗）
・土台の劣化（雨水の侵入）
・外装の劣化
・設備の劣化（不具合）
・今後の活用上の不具合

■現在検討している課題
①劣化を防止する外装部分
②雨の侵入を防ぐための防水工事
③点検の上、使用できるものは残置する。
④改修工事部分で今回オリジナルに復元する部分
⑤建物の歴史・価値を伝える。西側と東側は50%の復元を
50%の復元を検討しています。
⑥改修する材料
⑦耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。
⑧改修する材料
⑨耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。
⑩改修する材料
⑪耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。

■利用のために、暖房設備を導入します。
これによりランニングコストにも配慮します。また、
それに伴う電気設備を改修します。
水回りについても、現状の不具合を修正し、バリア
フリーにも配慮します。

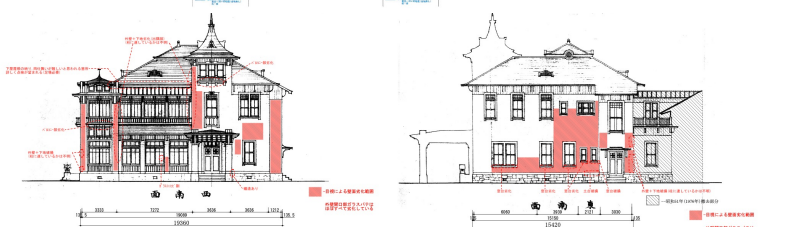
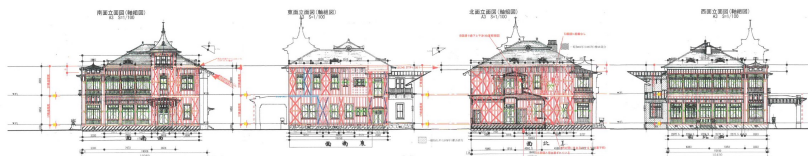
旧東伏見宮葉山別邸の改修方針と注意点

別邸の躯体の劣化状況は急である（特に東側）
一部は多く手を加える必要がある（特に東側）
一方、コートを急ぎ、歴史的価値を損なうことは避けたい
そのためには（この方）：今回の改修で復元も検討
①劣化を防止する外装部分
②雨の侵入を防ぐための防水工事
③点検の上、使用できるものは残置する。
④改修工事部分で今回オリジナルに復元する部分
⑤建物の歴史・価値を伝える。西側と東側は50%の復元を
50%の復元を検討しています。
⑥改修する材料
⑦耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。
⑧改修する材料
⑨耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。
⑩改修する材料
⑪耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。

①劣化を防止する外装部分
②雨の侵入を防ぐための防水工事
③点検の上、使用できるものは残置する。
④改修工事部分で今回オリジナルに復元する部分
⑤建物の歴史・価値を伝える。西側と東側は50%の復元を
50%の復元を検討しています。
⑥改修する材料
⑦耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。
⑧改修する材料
⑨耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。
⑩改修する材料
⑪耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。

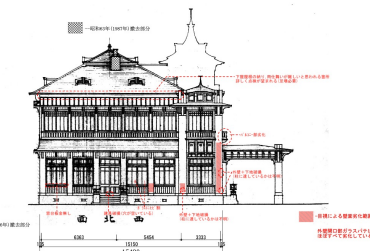
①劣化を防止する外装部分
②雨の侵入を防ぐための防水工事
③点検の上、使用できるものは残置する。
④改修工事部分で今回オリジナルに復元する部分
⑤建物の歴史・価値を伝える。西側と東側は50%の復元を
50%の復元を検討しています。
⑥改修する材料
⑦耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。
⑧改修する材料
⑨耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。
⑩改修する材料
⑪耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。

①劣化を防止する外装部分
②雨の侵入を防ぐための防水工事
③点検の上、使用できるものは残置する。
④改修工事部分で今回オリジナルに復元する部分
⑤建物の歴史・価値を伝える。西側と東側は50%の復元を
50%の復元を検討しています。
⑥改修する材料
⑦耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。
⑧改修する材料
⑨耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。
⑩改修する材料
⑪耐久性のある素材に近しい、強度のある素材を検討して
います。



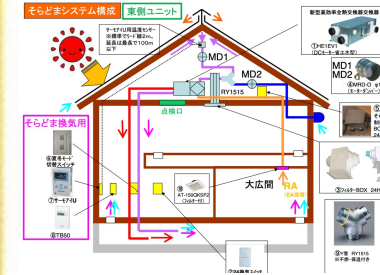
特に腐朽している箇所

□ 上記以外の外壁は基本的に90%替替える
校証により10%は残置する予定

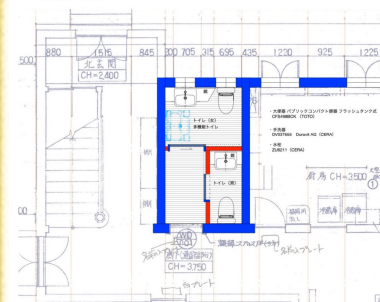


外壁板の改修計画

	竣工当時	現状	今回の改修工 事	備考
外壁板の材質	漆喰または硬質の針 葉樹と見られる	1987年改修で杉板 に交換し、腐食が 激しい状態	杉で張替える	神奈川県ヘリテー ジマシーナリー協 会により検証する
外壁板の形状	ドイツ下見板、覆 輪付き	覆輪なしのドイツ 下見で張替える	ドイツ下見板、覆 輪付きの形状に復 元	神奈川県ヘリテー ジマシーナリー協 会により検証する
外壁板の塗装	不詳	合成樹脂塗料/白 色	浸透型無機塗料/白 色	神奈川県ヘリテー ジマシーナリー協 会により検証する
外壁の内部造 作	新素材なし	新素材/グラス ウール50厚	新素材/羊毛+ボ リステス40厚、透 気シート、断熱材 MDP8厚、透 気シート、断熱材 18厚、外壁20 厚	



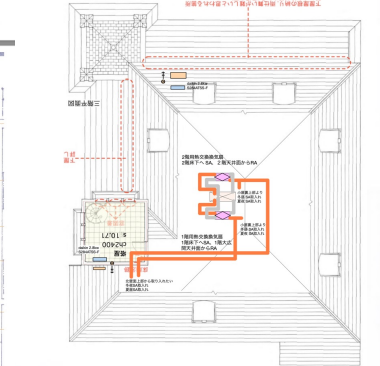
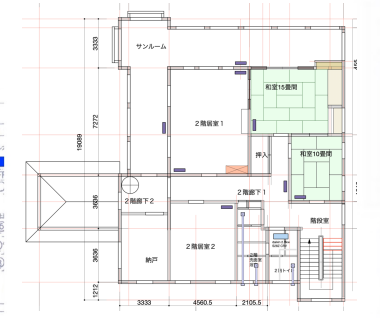
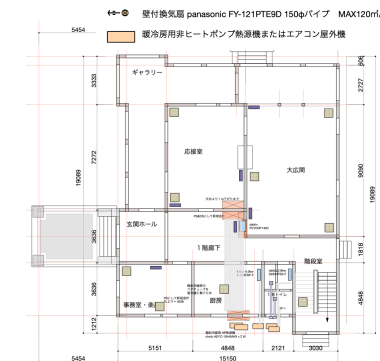
一階水回りの改修



二階水回りの改修



■ 床下点検口600角・通気ガラリ型
■ 断熱材断熱バネル 750w2400h
■ ポロプロレン樹脂
■ 壁掛け型エアコン
■ 床置き型 業務エアコン
■ 天井換気扇 panasonic FV-24J3B/56 100p/パイプ 220mmh
■ 外周フードFY-MFX043
■ 壁付換気扇 panasonic FY-12T19ED 150p/パイプ MAX120r/h
■ 暖房用非ヒートポンプ熱源機またはエアコン外機





「千歳」副
長としての
記念はがき
(1905)



1914-1918 Prince Arthur of Connaught
introducing Prince Fushimi of Japan to
British Naval and Military officers.



Sir Douglas Haig and Prince
Higashifushimi Yorihiro, WW1
Field Marshal Sir Douglas Haig and
Fleet Admiral Prince Higashifushimi
Yorihiro of the Japanese imperial
family, meeting during World War
One. Date: circa 1916

1918年にイギリス海軍を訪問した東伏見
宮依仁親王（左）





東伏見宮家の宝冠

元皇族東伏見家が財産税で手放した東伏見周子さんの宝冠。時価300万円＝1955（昭和30）年4月11日1955



関東大震災直後

実践女学校で生徒たちによる罹災者に贈る着物の仕立てを見る東伏見宮妃（左）と竹田宮妃（中央）両殿下。右は下田歌子校長大正12(1923)年9月27日撮影



愛国婦人会新年祝賀会。テーブル左から秩父宮勢津子、総裁の東伏見宮周子、賀陽宮敏子の各妃殿下 昭和7年(1932)1月12日



台湾の愛国婦人会総会に臨席のため、東京駅を立つ東伏見宮妃周子殿下 昭和4(1929)年10月19日



東伏見宮周子妃殿下（中央）愛国婦人会幹部と記念撮影 昭和10年(1935)ごろ



東伏見宮周子妃殿下 昭和10年(1935)ごろ→



第1619号「同盟写真特報」
畏し各宮妃殿下、恤兵（じゅっぺい）作業にいそしませ給う、写真は御右より高松宮妃殿下、梨本宮妃殿下、東伏見宮妃殿下、東久邇宮妃殿下 昭和16年(1941)12月13日

□履歴／東伏見宮依仁親王 ひがしふしみのみや よりひとしんのう

もと **小松宮繼嗣**

もと **定麿王** さだまる [山階宮繼嗣 のち小松宮繼嗣]

【幼稱】

「**定宮**」 さだのみや

【出自】

邦家親王 [伏見宮] の[十七]男。

明治天皇の養子。

晃親王 [山階宮] の養嗣子、のち彰仁親王 [小松宮] の養嗣子 (離)

【生母】

百々重 (百重、百枝)

伏見宮家女房 (若年寄)

伊丹吉子

妙法院宮家臣従五位下伊丹尾張介藤原朝臣保祿の女子

生母は、有栖川宮家臣鎌田政博の一女、友子 (伊丹保祿の妻

天保八年 (1837) 六月十九日生

嘉永五年 (1852)、伏見宮に出仕。十六歳。

明治五年 (1872)、邦家親王薨去後、伏見宮より退く。

大正四年 (1915) 十一月三日、死去。七十九歳。

資料／『依仁親王』 (東伏見宮蔵版、昭和二年 (1927) 五月) 2~3頁

【経歴】

慶応三年 (1867) 九月十九日生。

「**定宮**」

明治二年 (1869) 二月二十二日、「定麿」と命名

明治二年 (1869) 二月二十四日、晃親王 [山階宮] の養嗣子となる、三歳

明治四年 (1871) 九月十六日、山階宮邸へ移る

明治五年 (1872) 三月、晃親王 [山階宮] と共に東京に移住する

明治十年 (1877) 三月一日、海軍兵學校に入校。十一歳

定麿王 [山階宮繼嗣]

明治十四年 (1881) 二月五日、特旨を以て、晃親王 [山階宮] 繼嗣として「二代目皇族」に列される

明治十七年 (1884) 四月二十七日、イギリス留學のため出發

定麿王 [小松宮繼嗣]

明治十八年 (1885) 十二月二日、勅旨を以て、山階宮繼嗣を止められ、彰仁親王 [小松宮] の繼嗣となる

依仁王 [小松宮繼嗣]

明治十九年 (1886) 五月一日、名を「依仁」と賜わる

依仁親王 [小松宮繼嗣]

明治十九年 (1886) 五月一日、明治天皇の養子となり、親王宣下三品に叙される

明治二十年 (1887) 七月、イギリスよりフランスへ移る

明治二十一年 (1888) 十月四日、ブレスト海軍兵學校に入校

明治二十三年 (1890) 七月二十六日、ブレスト海軍兵學校を卒業

明治二十三年 (1890) 八月十四日、海軍少尉に任じられ、引續きフランス國留學を命じられる

明治二十五年 (1892) 二月二十三日、歸國、東京に到着する

明治二十六年 (1893) 八月四日、訪欧のため横濱より出港

1893.08.15. バンクーバー着

1893.09.09. ワシントンにてクリーブランド大統領と会見

1893.09.27. ニューヨーク出港

1893.10.04. ロンドン着

1894.02.23. サンクトペテルブルグにてロシア皇帝に謁見

1894.03.04. イスタンブルにてトルコ皇帝に謁見

1894.04.01. ウィーン発

1894.04.06. ヴェネツィア着

明治二十七年 (1894) 九月二十六日、横濱に歸着

依仁親王 [東伏見宮]

明治三十六年 (1903) 一月三十一日、彰仁親王 [小松宮] 繼嗣を

止められ、「東伏見宮」の稱號を賜わり、一家を創立する

大正七年 (1918) 七月二日、海軍大將に進み、軍事參議官に任じられる

大正十一年 (1922) 六月二十五日二十三時二十五分、死亡。五十六歳

大正十一年 (1922) 六月二十六日「危篤」

大正十一年 (1922) 六月二十七日、元帥府に列せられる

大正十一年 (1922) 六月二十七日午後11時25分「薨去」

【墓所】

東京都文京區大塚の豊島岡皇族墓地

【配偶】

八重子やえこ

依仁親王〔小松宮繼嗣〕妃
 山内豊信（とよしげ。容堂）の三女。
 侯爵山内豊景（とよかげ）の叔母。
 明治二年（一八六九）六月七／九日生。
 明治二十五年（一八九二）七月七日、成婚。
 明治二十九年（一八九六）四月三十日、病氣の故を以て離婚。
 秋元興朝（あきもと おきとも。子爵）と再婚。
 大正八年（一九一九）十月九日、死去。

周子かねこ

依仁親王〔東伏見宮 もと小松宮繼嗣〕妃
 のち東伏見周子
 岩倉具定（侯爵）の一女。
 明治九年（1876）八月二十九日生。
 明治三十一年（1898）二月十日、成婚。
 牧野伸顯より「御聰明」と評されている

【子女】なし

【祭祀継承者】

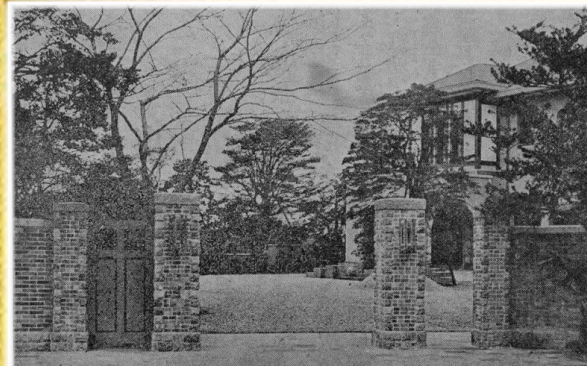
東伏見邦英ひがしふしみくにひで

邦彦王〔久邇宮（二）〕の三男。
 伯爵
 もと邦英王
 のち東伏見慈治（ひがしふしみ じこう）

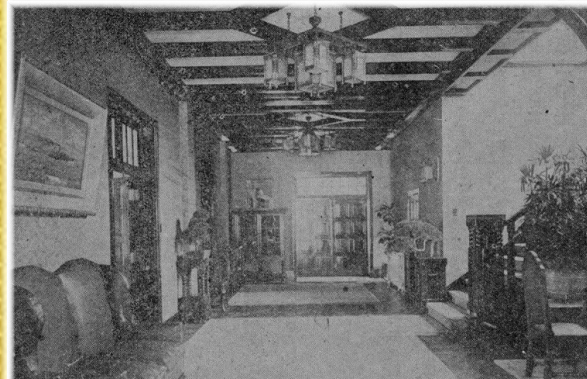
【ハワイ皇室との婚姻の問題】

明治十四年（1881）三月、来日中のハワイ皇帝カラカウアが定鷹王と対面する。
 カラカウアは、定鷹王を、繼嗣たる姪ヴィクトリア・カイウラニの配偶者として養子に迎えたき旨を明治天皇に申し出た。しかし、「外国皇室と婚嫁を通ずる事は、累を將來に及ぼす虞【オソレ】なきにあらず」（外務卿井上馨）として、實現に至らなかった。

東伏見宮依仁親王 東伏見宮家		
1867年10月16日 - 1922年6月27日		
先代 (創設)	東伏見宮 初代：1903 - 1922	次代 (廃止)
軍職		
先代 藤井較一	横須賀鎮守府司令長官 第16代：1916年12月1日 - 1917年12月1日	次代 名和又八郎
先代 八代六郎	第二艦隊司令長官 第11代：1917年12月1日 - 1918年6月13日	次代 山屋他人



■東京本邸
 豊多摩郡渋谷町
 現：渋谷区東
 ※戦後は常陸宮
 邸となる



■葉山別邸
 神奈川県三浦郡葉山町
 1914年竣工

『明治天皇紀』

1903年1月31日

小松宮彰仁親王の請を充し依仁親王をして彰仁親王の継嗣たる事を止め、別に一戸を立てて東伏見宮と称せしめたまう。

彰仁親王男子なきをもって故北白川能久親王の第四子輝久王を養うこと子の如くす。

依仁親王は既に継嗣と為れりといえども彰仁親王はこれに遺産を伝うるの意なく、ついに自ら臣籍に下り別に養子を納れてその跡を継がしめんと欲し、去年4月まさにイギリスに航せんとするに臨み、宮内大臣田中光顕子爵に告げ詮議するに、

「もし輝久王をして遺産を継がしめ、これを臣籍に列して侯爵を授け、小松氏を称するを得しめば、自ら臣籍に下るの一事を断念すべく、依仁親王には別に家号を賜りて一戸を立てしめんと欲する」の旨をもってす。

こと宸聴に達す。

天皇、その情を憐みてこれを充し、ついにこの恩命を下したまえるなり。

1907年2月26日

北白川宮能久王の寡妃富子および小松宮彰仁親王の寡妃頼子相議し、能久親王の子輝久王をもって彰仁親王の遺跡を継がしめんがため、皇族の身位を改むることなくその嗣子と為さんと欲し上書してこれを請う。

天皇、侍従長侯爵徳大寺実則をして伊藤博文の意見を徴せしめたまう。

伊藤以為らく「皇族の養子を許さざるは皇室典範に明文あり。ゆえに皇族の身位を改めずしてその嗣子と為すことは則ち不可なり。ただし勅旨または情願をもってこれを臣籍に降し、授くるに公侯爵中の一をもってし、なお適當の資産を下賜し、もってその嗣と為さば則ち可ならん」と。

天皇、伊藤の意見に基づき翌日徳大寺をして命を宮内大臣子爵田中光顕に伝え、

富子・頼子二妃の情願を斥け、輝久王を臣籍に降ろして公侯爵中の一を授け、小松の家号を賜い、彰仁親王の遺跡を継がしむべき旨懇諭せしめたまう。

【BROG直球和館の解説】

彰仁親王は実子が無かったため異腹弟依仁親王を養子に迎えていた。

当然小松宮家は依仁親王によって継がれるはずであったが、突然彰仁親王は自分の臣籍降下と北白川宮輝久王を養子にすることを主張する。

輝久王は彰仁親王の同腹弟北白川能久親王が側室に生ませた子である。

当然宮内大臣はこれをしりぞける。

すると今度は輝久王だけでも臣籍降下させて侯爵にして自分の遺産を相続させてくれたら、自分の臣籍降下はあきらめると主張する。

根負けした政府はこれを認め、依仁親王には東伏見宮を創設した。

。

ところが東伏見宮が創設された直後に彰仁親王が死亡、小松宮家の当主の座が空白となった。

そこで今度は彰仁親王の妻頼子妃と北白川宮輝久王の母富子妃の二人が、輝久王を臣籍降下させず皇族のまま小松宮家を相続させたいと主張した。

明治天皇はこれを一蹴、当初の予定通り輝久王は臣籍降下して小松輝久侯爵となった。

彰仁親王がそこまで依仁親王に相続させることを嫌がった理由のはっきりしていないが、彰仁親王と依仁親王は別々の側室の子、彰仁親王と能久親王は同じ側室の子、異腹弟ではなく同腹弟の子に遺産を遺したかったのかもしれない。

箱根にかつて東伏見宮家の別邸があった

温泉地として知られ、ススキの景観が美しい現在の神奈川県箱根町仙石原に旧宮家の一つ、東伏見宮家の別邸（別荘）がかつてあったことはあまり知られていない。関東大震災の前年の大正11（1922）年に逝去した東伏見宮依仁親王の妻、周子妃が昭和初期（8年とする文献もある）に創建したものだ。依仁親王には息子がいなかったため東伏見宮家の断絶はすでに決まっていたが、周子妃が終戦まで東伏見宮家を守り、戦後の昭和22年にほか10の旧宮家とともに皇籍離脱（臣籍降下）して、民間人の東伏見周子さんとなった。

周子妃は明治維新の十傑に数えられる岩倉具視の孫。歌手の加山雄三さんの大伯母にあたる。東伏見宮家の旧箱根別邸は昭和25年に売却された。現在は民有地となっているため、詳しい場所はご紹介できないが、仙石原ススキ草原に徒歩でもいくことが可能な別荘地だ。

一方、旧東伏見宮葉山別邸は28年、イエズス孝女会修道院に譲渡され、2回の改修を経て現在に至っている。この旧葉山別邸は平成29年に国登録有形文化財（建造物）となっている。

養子をとれずに

周子妃は旧皇室典範の規定により養子をとることは出来なかったが、久邇宮（くにのみや）家の邦英王を養子のようにして育てていたことから、邦英王は後継者のいない東伏見宮家のお祭りを継承するため昭和6年に臣籍降下。東伏見邦英伯爵となった。

この東伏見邦英伯爵が横浜・磯子に建てた旧東伏見邦英伯爵別邸も現存している。東伏見邦英伯爵はその後出家し、皇族や公家がかつて住職を務めた主要な寺院「十三門跡寺院」の一つ、青蓮院（しょうれんいん）の住職（門主）となって法名を東伏見慈洽（じごう）さんと改め、平成26年に逝去するまで長く務めたことはよく知られる。

香淳皇后と近しく

周子妃は香淳皇后が皇太子妃時代に輔導（指導）役を務めた人物でもあり、香淳皇后とは近い関係にあったとされる。宮内庁

が昭和天皇の生涯をまとめた『昭和天皇実録』には昭和3年6月5日に「皇后は参殿中の故依仁親王妃周子と組まれ、女官等を御相手にゴルフをされる」との記述がある。いかに近しかったのかがうかがえる。

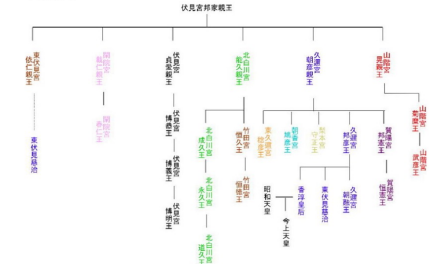
ちなみに宮内庁のホームページ（HP）には、22年に周子妃が皇族として最後に臨んだ年明けの恒例行事「歌会始の儀」で読んだ歌が、以下のように掲載されている。

「うき雲のあともこのらずうつくしきにほひのみなるあけぼの空」

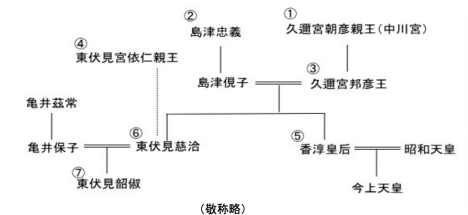
周子妃は昭和30年3月4日に民間人の東伏見周子さんとして逝去したが、同月14日の朝日新聞には「**遺産は公共事業へ 故東伏見周子さん 遺言状で寄付望む**」と題する記事が載っており、その中に「戦後は（中略）箱根仙石原の別荘、葉山の別邸も次々と売り払った」と記されている。

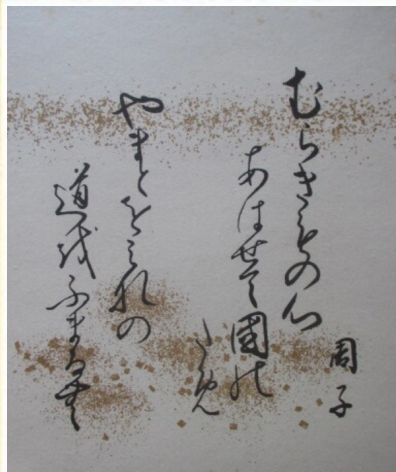
旧葉山別邸は洋館だが箱根にあった別邸は和館だったと言われている。現在の箱根町は31年9月に箱根町、湯本町、温泉村、宮城野村、仙石原村の5町村が合併してできた町のため、別邸があったのは厳密には箱根町ではなく仙石原村だったことになる。

<略家系図>

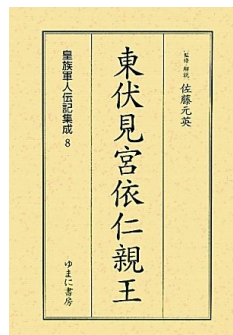


家系略図





愛国婦人会総裁・東伏見宮依仁親王妃周子「自筆和歌色紙」愛国婦人会、昭和初年・巧芸版、菊変型判、一通



皇族軍人伝記集成 第8巻 東伏見宮依仁親王

東伏見宮依仁親王〔ひがしふしみのみや・よりひと・しんのう〕
 慶応三年（一八六七）～大正十一年（一九二二） 伏見宮邦家親王
 第一七王子。幼名定宮。はじめ長兄・山階宮晃親王の養子。英国留
 学後、明治一八年に小松宮継嗣となり、翌年、親王宣下。依仁と諱
 を改める。明治二〇年から三年間、仏国海軍兵学校に学ぶ。帰朝後、
 海軍少尉。明治三六年、小松宮薨去後、新たに東伏見宮家創立。横
 須賀鎮守府司令長官、第二艦隊司令長官を歴任し、海軍大将。英
 ジョージ五世国王戴冠式に参列。大正十一年の薨去後、元帥。なお、
 秘話として明治一八年、日本を訪れたハワイ・カラカウア国王がア
 メリカの圧迫に対抗する手立ての一つに自分の姪と依仁親王の婚姻
 を日本側に提案したというものがある。

■『依仁親王』（東伏見宮蔵版・一九二七年）／『故依仁親王と仏
 国海軍兵学校』（東伏見宮家編・刊、〔一九二九年〕）親王妃より
 親王の生前、側近として奉仕していた海軍軍人に「親王事蹟の記
 述」が求められ編纂を開始。『此一戦』で有名な水野広徳に編集を
 囑託するも、関東大震災で一時頓挫。態勢を立て直し昭和二年に完
 成。皇族軍人が軍務への精励とともに、当時の外交の重要要素であ
 る外国皇室との「社交」にも献身が求められていた様子が判読でき
 る。また乗員だった軍艦浪速がアメリカのハワイ併合時に派遣され
 た際の記述も興味深い。日仏海軍の隠れた親善交流を伝える『依仁
 親王と仏国海軍兵学校』も併録。

東伏見宮
 依仁親王
 東伏見宮
 依仁親王
 妃周子
 書・松岡
 双幅
 【大正8
 年依仁親
 王52
 歳・周子
 43歳】



皇籍離脱

引用資料／葛南支部 小浦泰之

終戦に伴い、GHQによる統治が進む中、経済的に従来の皇室規模を維持できなくなり11の宮家は皇籍を離脱しました。離脱にあたりGHQの指示で財産税法案が衆議院に提出され、最大90%の高税率の課税が皇室の個人資産にかけられることとなります。多くの宮家は税金を工面できなかったため、物納せざるを得ませんでした。その後皇籍離脱一時金が各宮家に支払われますが、財産税を十分に補てんできる額ではありませんでした。一時金は各宮家の人数により定められました。

宮家	課税額	離脱一時金						
		当初額	当主・王	王	親王妃 内親王	王妃	女王	支給額
伏見宮	610万円	315万円	1人	0人	0人	1人	2人	465万円
閑院宮	420万円	210万円	0人	0人	0人	1人	0人	105万円
山階宮	92万円	158万円	0人	0人	0人	0人	0人	0万円
北白川宮	654万円	338万円	1人	0人	1人	1人	1人	540万円
梨本宮	257万円	257万円	0人	0人	0人	1人	0人	105万円
久邇宮	539万円	840万円	0人	3人	0人	2人	4人	944万円
賀陽宮	107万円	840万円	0人	5人	0人	1人	0人	830万円
東伏見宮	120万円	113万円	0人	0人	1人	0人	0人	150万円
竹田宮	465万円	525万円	0人	2人	0人	1人	2人	545万円
朝香宮	844万円	525万円	0人	1人	0人	1人	2人	400万円
東久邇宮	226万円	675万円	0人	2人	2人	0人	1人	665万円

※山階宮家は支給額が0円だが、後日密かに140万円が支給された。

断絶した旧皇族家

閑院宮家・・・世襲親王家の一つ。皇籍離脱時の当主、春仁王の死去により1988年（昭和63年）

断絶。ただし閑院宮家出身の師仁親王（光格天皇）の子孫は現天皇家。

山階宮・・・皇籍離脱時の当主：武彦王の死去により1987年（昭和62年）断絶。

梨本家・・・皇籍離脱時の当主：守正王の死後、未亡人の伊都子が甥の梨本徳彦を養子とした。実子

系統では断絶。

賀陽家・・・皇籍離脱時の当主：恒憲王の死後、長男：邦寿が1986年（昭和61年）に死去し、断絶。ただし三男：章憲には男子の子孫がある。

東伏見家・・・皇籍離脱時に依仁親王妃周子のみ。彼女の死去により1955年（昭和30年）断絶。ただし祭祀は東伏見慈治氏が継承。

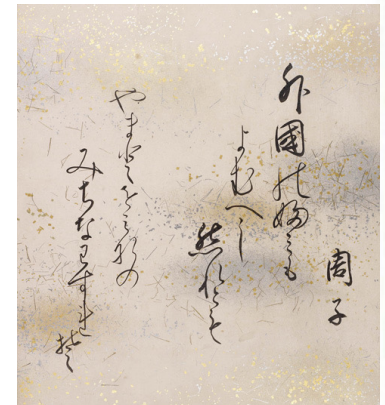


「徽音堂」 昭和辛未春日 周子

昭和7（1932）年に竣工したお茶の水女子大学本館の中央に位置する講堂の完成にあたって贈られた、東伏見宮妃周子の手になる額。講堂内部正面の上方に掲げられている。「徽音」とは、「美しい音」「美德」という意味で、先人の美德をよく受け継ぎ、德音を行ったという中国の故事にちなむ。

東伏見宮妃周子

昭和8(1933)年に竣工したお茶の水女子大学図書閲覧室に掲げるために下賜された色紙。昭和7年には講堂扁額を下賜され、また同年11月の開校式に出席されるなど、周子妃は女高師と深いつながりを有していた。能筆として知られている。



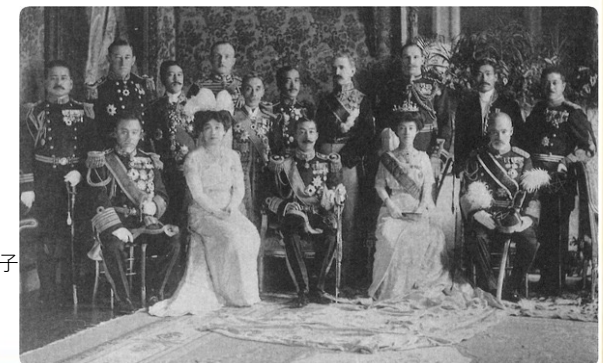
昭和22年歌会始お題「あけぼの」

故依仁親王妃周子殿下（東伏見宮）

うき雲のあともこのらずうつくしきにほひのみなるあけぼのの空

1911年 イギリス国王 ジョージ5世戴冠式

椅子5人左から
東郷平八郎
東伏見宮家御用掛岡慶子
東伏見宮依仁親王
東伏見宮周子妃
乃木希典



東伏見家(伯爵家)のその後

引用・ウィキペディア

東伏見家（ひがしふしみけ）は、東伏見宮依仁親王一代で絶えた東伏見宮家の祭祀を継承する。

慶応3年（1867年）に伏見宮邦家親王の第17王子として生まれた依仁親王は、幼くして長兄山階宮晃親王の養子となったが、明治6年（1873年）に晃親王に実子菊麿王が誕生したことで、依仁親王は山階宮家を離別することになり、ついで兄小松宮彰仁親王の後嗣となったが、晩年に彰仁親王が依仁親王を後嗣とするのを取りやめたため、小松宮家とも離別。

結局依仁親王は別に東伏見宮家を興すことになった。この宮号は小松宮に改称する前に依仁親王が一時期称していたものだった^[1]。

東伏見宮依仁親王は大正11年（1922年）に薨去。依仁親王には周子妃との間に子供がなかったため、東伏見宮家は一代で絶家したが、依仁親王は生前東伏見宮家断絶後に備えて久邇宮邦彦王の第3王子邦英王（明治43年5月16日生。平成26年1月1日没^[2]）

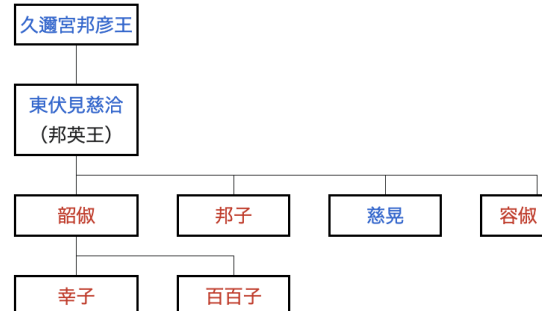
邦彦王は香淳皇后の父であり、つまり邦英王は香淳皇后の実弟）を9歳の頃から養育していた^[3]。

邦英王は東伏見宮家の祭祀を継承するため、昭和6年4月に臣籍降下して東伏見の家名を賜り、華族の伯爵位を与えられた。夫人は亀井茲常伯爵の次女保子（大正7年5月12日生、平成21年9月29日没）^[4]。後に邦英は天台宗青蓮門主となり、東伏見慈治と称した。その後、次男の慈晃（守叡。昭和17年6月21日生）が門主を継いでいる^[5]。

慈治の長男は韶叡（昭和15年10月10日生）、その夫人は田島一男の娘禮子（昭和19年1月14日生）。夫妻の間の子に幸子（昭和44年7月10日生）と百百子（昭和49年8月6日生）の姉妹がある^[6]。

系図 [編集]

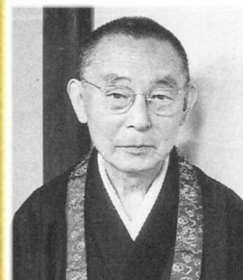
系図は『平成新修旧華族家系大成 下巻』に準拠^[1]。



◆初代伯爵 東伏見邦英／東伏見慈治
1910-2014 104歳没
久邇宮邦彦王の子久邇宮邦英王
臣籍降下して東伏見宮家の祭祀を継承し
東伏見伯爵となる
後に僧侶となり東伏見慈治と改名
・妻 亀井保子 伯爵亀井茲常の娘



養母東伏見宮周子妃と



皇后の弟さんの「説法」

天台宗主への意門に臨み東伏見門主

旧東伏見宮葉山別邸を設計した建築家 木子幸三郎とは どのような人物だったのか

木子 幸三郎（きご こうざぶろう）
明治7年（1874）～昭和16年（1941）

木子幸三郎は明治30年代から昭和10年代にかけて活動した建築家で、当時における「和」と「洋」の建築に関する最良の知識を兼備していた点で注目される存在である。
施主の多くは皇族や富豪で、住宅の規模も大きい。木子はそれらの住宅を時間をかけて細部に至るまで設計していたと考えられる。その意匠は外部・内部とも「和」と「洋」を截然と分けるのが一般的で、混在させていない。
「和」の多くは正統的な書院造で、数奇屋風も一部で手がけている。「洋」は最初は19世紀のフランス風が多く、大正末期からライト風、アール・デコ風が見られるようになる。

木子清敬の二男として東京市赤坂区に生まれた。
明治34年（1901）東京帝国大学工科大学建築学科選科を修了し、大阪の住友本店臨時建築部に入る。
明治35年（1902）一年志願兵として入隊。
※のちの幹部候補生制度になるものだそうです。
除隊後、東宮御所造営局勤務となる。
明治38年（1905）からは工手学校で講師を開始し和洋建築の講義をおこなう。
明治40年～大正10年（1907～1921）にかけて、**沼津御用邸附属屋増改築**、日光田母沢御用邸増改築及び附属屋新築、葉山御用邸増改築及び附属屋新築に携わった。
明治44年（1911）宮内省内匠寮技師となる。
大正8年（1919）欧米留学を命じられる。翌年帰国
木子家に生まれた幸三郎は、和風建築はもちろんのこと、洋風建築においても卓越した手腕を発揮した。
内匠寮においては上司の片山東熊とともに竹田宮邸や北白川宮邸などの洋風邸宅建築を手がけている。
大正11年（1922）宮内省を退職し、東京に木子建築事務所を設立する。
昭和16年（1941）逝去。

●旧沼津御用邸 静岡県沼津市
沼津御用邸記念公園内
●西付属邸
明治38年～明治41年（1906～1908）
川村伯爵の死後、別邸を買い上げ昭和天皇の御用邸として設置



建造物名	年	所在地	指定	備考
旧渡邊千秋邸洋館 (現・トヨタ博物館記念館)	1905年（明治38年）	長野県茅野市		移築、非公開
梨本宮東京本邸	1910年 （明治43年）	東京都渋谷区		1945年（昭和20年）に焼失
旧竹田宮邸洋館 (現・グランドプリンスホテル高輪貴賓館)	1911年（明治44年）	東京都港区		片山東熊と共同設計
旧小樽区公会堂（現・小樽市公会堂）	1911年（明治44年）	北海道小樽市		
旧高松宮島別邸日本館 (現・福島県迎賓館)	1923年（大正12年）	福島県猪苗代町	重要文化財	
旧十二銀行函館支店 (旧函館信用金庫本店)	1926年（大正15年）	北海道函館市		
富士屋ホテル食堂	1930年（昭和5年）	神奈川県箱根町	登録有形文化財	
三共品川工場本館	1932年（昭和7年）	東京都品川区		
旧鈴木忠治邸（現・駐日ローマ法王庁）	1934年（昭和9年）	東京都千代田区		



〔木子幸三郎一家〕記念写真 大正8年



〔木子幸三郎〕写真（光徳寺にて）昭和11年5月29日



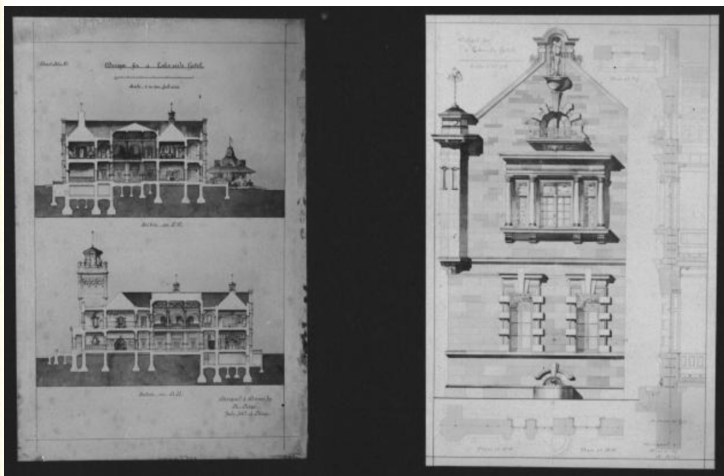
〔木子幸三郎邸外観・書斎〕写真 〔昭和〕7年12月10日



大正天皇御大礼の時の木子幸三郎の写真 大正4年11月10日

2019文化財ウィーク展示資料解説p.10(24)

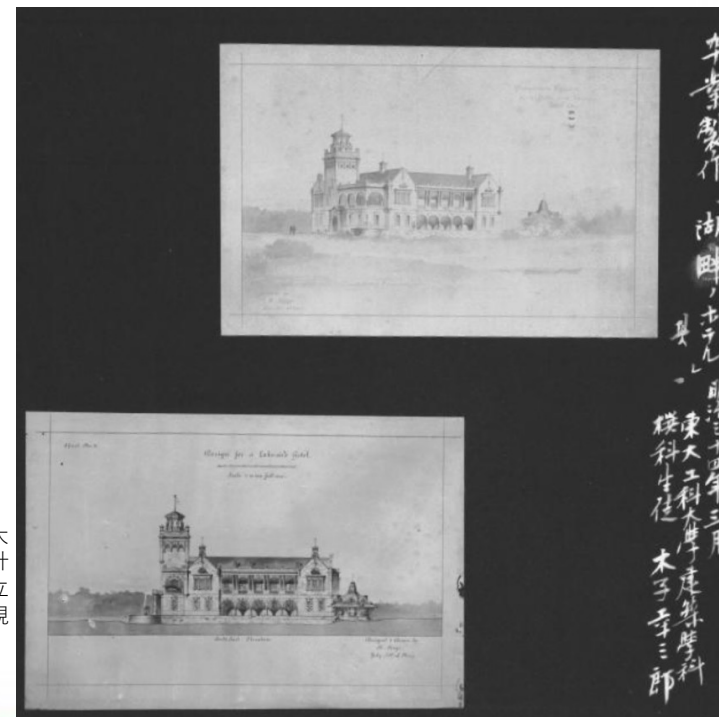
「宮内省内匠寮（くなくしようたくみりょう）技師であった幸三郎は、「大礼使（たいれいし）官制」（大正2・4年（1913・1915）の公布）により、大礼の事務を司る大礼使事務官に任命されました。幸三郎は即位の礼の当日、春興殿（しゅんこうでん）における「賢所大前ノ儀（かしこどころおおまへのぎ）」、および「紫宸殿ノ儀（ししんでんのぎ）」において、威儀物（いぎのもの）の一つである鉾（ほこ）の捧持（ほうじ）者（儀式の威容を整えるために所定の位置に武器を捧持して立つ者）として参列しました。



東京帝国大学卒業設計
平面図・立面図・透視
図写真
明治34年3
月



大正天皇御大礼の時の木子幸三郎の写真 大正4年11月15日



東京帝国大学卒業設計
平面図・立面図・透視
図写真
明治34年3
月

木子幸三郎の弟 木子七郎きごしちろう も素晴らしい建築家だった！

明治17年（1884）～昭和30年（1955）

木子清敬の四男として生まれる。

明治29年（1896） 高等師範学校附属小学校（現・筑波大学付属小学校）卒業。

明治34年（1901） 高等師範学校附属中学校（現・筑波大学附属中学校・高等学校）卒業。

第四高等学校を経て、東京帝国大学工科大学建築学科に入る。

明治44年（1911） 東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し、大林組設計部技師として来阪。

大正2年（1913） 大林組を退職し、木子七郎建築事務所を開設する。

その後、日本赤十字社病院嘱託、日本赤十字社大阪支部病院嘱託などを務める。

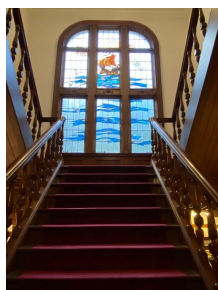
大正10年（1921） 海外を視察（中国、インド、欧州、アメリカ）

昭和12年（1937） フランスより、レジオンドヌール勲章を授与される。

昭和30年（1955） 逝去。



関西日仏学館
（現・アンステイチュ・フランセ関西）
昭和11年
（1936）竣工
京都府京都市左京区



松山城本丸の南側にある萬翠荘は、1922年（大正11年）に旧松山藩主の子孫にあたる久松定謨伯爵が、別邸として建設した。1922年竣工で来年100周年となる。国の重要文化財だ。

引用資料・BUNGANET

秘めた迷宮空間にサラブレッド・木子七郎の反骨精神を見た

建築の世界には、何世代にもわたって建築を生業（なりわい）としている家系があって、木子七郎はその1つ、木子ファミリーのサラブレッドだ。木子家は代々、宮中の修理職棟梁の家柄。父の木子清敬（きよよし、1845～1907年）は、明治維新後に宮内庁に入り、明治宮殿をはじめ、明治期に皇室関係の造営を担当した。清敬は辰野金吾に請われて、帝国大学工科大学造家学科（現・東京大学工学部建築学科）で初めて日本建築の授業を担当した。洋風建築が勢いを増すなかで、「日本建築」の立脚点をつくった人である。

その息子、木子幸三郎と木子七郎は父の背中を見て、建築家となった。

兄の幸三郎（1874～1941年）は、東京帝国大学工科大学建築学科を出た後、いったんは大阪の住友本店臨時建築部（現・日建設計）に入るも、1911年に宮内省に入り、父と同様、皇室関係の建築を多く手がけた。

幸三郎より10歳年下の木子七郎も、東京帝国大学工科大学建築学科を卒業。しかし役所には行かず、大林組設計部技師として来阪。2年ほどで大林組を退職した後、木子七郎建築事務所を大阪で開設。大阪を拠点に公共建築などを多数手がけた。

木子七郎は松山市内でも複数の建築を設計した。妻の父である新田長次郎が実業家（現・ニッタの創業者）で、地元の名士だったからだ。

長い前振りとなったが、松山市に現存する木子七郎の建築を3つ巡った。



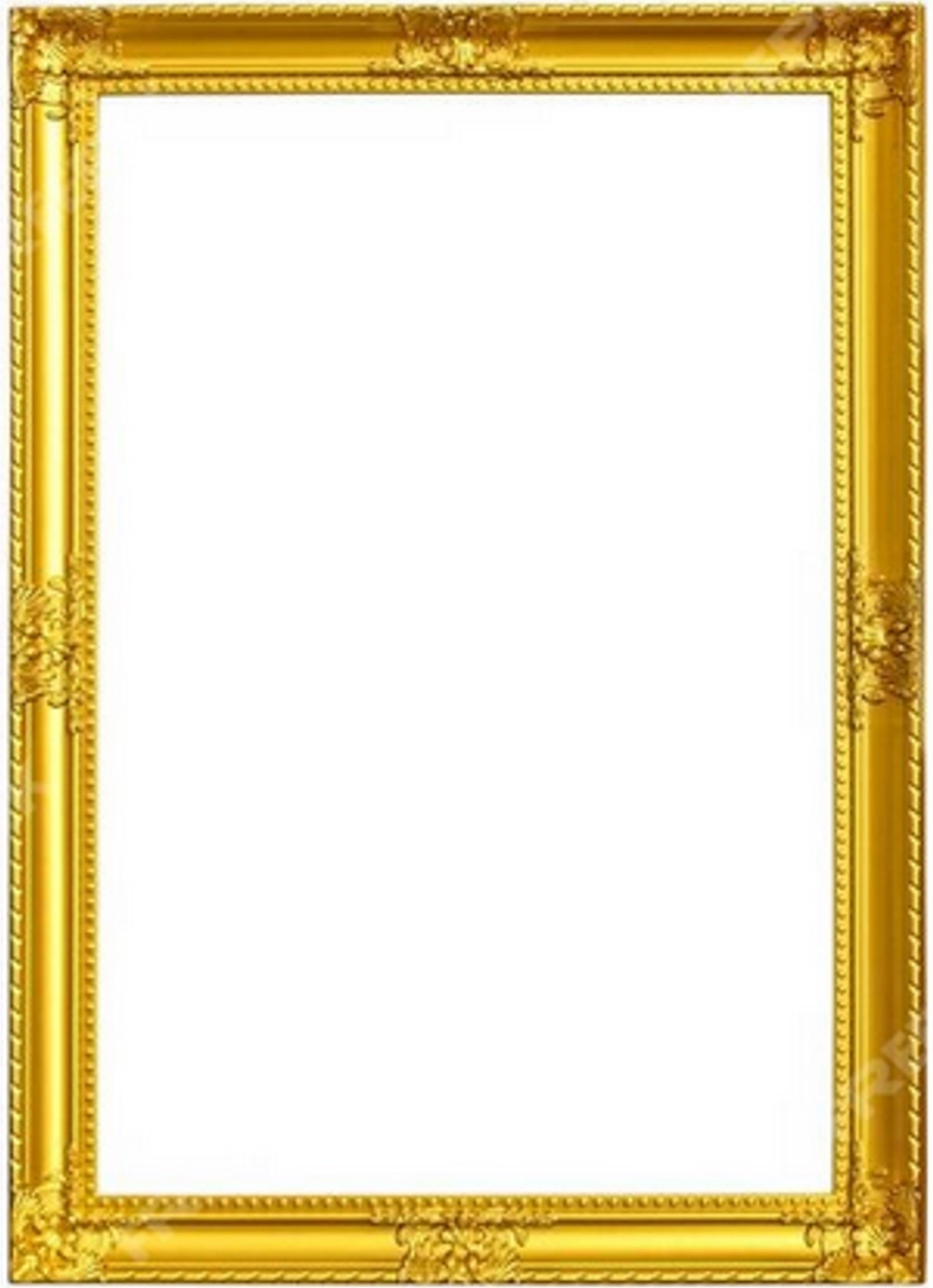
萬翠荘の2年後1925年に完成した石崎汽船旧本社
三津浜の港湾地区にある。



愛媛県庁本館 石垣汽船の4年後の1929年竣工、丸柱だけでこんなにスパンを飛ばした階段は、西洋の伝統ではなくモダニズム。

An ornate, multi-layered gold frame with intricate carvings and a beaded inner border.

その活動とデザインが参考になる
日本の洋館コレクション



出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

東伏見宮依仁親王（ひがしふしみのみや よりひとしんのう、1867年10月16日〈慶応3年9月19日〉 - 1922年〈大正11年〉6月27日）は、日本の皇族、海軍軍人^[*]。伏見宮邦家親王第17王子。官位は元帥海軍大将・大勲位・功三級。妃は土佐藩主山内豊信三女の八重子、次いで岩倉具定公爵長女周子（かねこ）。

生涯

初め名を**定麿王**という。1868年（慶応4年）2月、円満院門跡の相続が内定する。ただし、明治維新により、実現しなかった。1869年（明治2年）2月、兄宮・山階宮晃親王の養子となる。1877年3月、海軍兵学校に予科生として入学する。1884年4月、海軍兵学校を中退し、イギリス留学のために出発する。1885年12月に小松宮彰仁親王の養子となり、1886年5月に親王宣下を受け^[注釈 1]、明治天皇猶子となり名を依仁と改める。1887年（明治20年）7月、イギリスからフランスに移り、ブレスト海軍兵学校に入学する。1890年7月にブレスト海軍兵学校を卒業し、8月に海軍少尉に任官する。1892年2月、帰国する。以後は海軍軍人として生涯を歩む。1903年（明治36年）1月、小松宮彰仁親王の願い出により、新たに東伏見宮を創設した^[注釈 2]。彰仁親王とは生前折り合いが悪かったようである。日露戦争では巡洋艦「千歳」副長、同「千代田」艦長として参戦した。1911年の英国ジョージ5世の戴冠式に東郷平八郎、乃木希典を随員として参列した^[24]ほか、大日本水産会総裁、日仏協会名誉総裁などを歴任する。横須賀鎮守府司令長官、第二艦隊司令長官を歴任し、1918年（大正7年）7月、海軍大将に進む。1922年（大正11年）、56歳で薨去。薨去に際し大勲位菊花章頸飾と元帥の称号を賜った。親王には継嗣が無く、東伏見宮は一代で廃絶となった。なお、晩年の依仁親王は久邇宮邦彦王の三男邦英王を養子のようにしており、東伏見宮家の祭祀を継がせた。



1867年（慶応3年）旧暦9月19日

1869年（明治2年）旧暦2月24日

1877年（明治10年）3月1日

1884年（明治17年）4月27日

1885年（明治18年）12月2日

1886年（明治19年）5月1日

1887年（明治20年）7月

1889年（明治22年）7月15日

1890年（明治23年）2月

1890年（明治23年）7月26日

1890年（明治23年）8月14日

1891年（明治24年）10月7日

1892年（明治25年）3月27日

1892年（明治25年）7月7日

1892年（明治25年）9月28日

1893年（明治26年）6月22日

1894年（明治27年）8月3日

1894年（明治27年）10月5日

1894年（明治27年）12月9日

1895年（明治28年）7月29日

1895年（明治28年）11月27日

1896年（明治29年）4月30日

1897年（明治30年）4月30日

1898年（明治31年）2月10日

1898年（明治31年）4月19日

1898年（明治31年）9月1日

1899年（明治32年）9月29日

1901年（明治34年）1月22日

1901年（明治34年）12月12日

1902年（明治35年）5月23日

1903年（明治36年）1月31日

1903年（明治36年）9月26日

1903年（明治36年）12月18日

1905年（明治38年）1月12日

1905年（明治38年）12月20日

1906年（明治39年）4月1日

1906年（明治39年）4月7日

1906年（明治39年）12月24日

1909年（明治42年）12月1日

1911年（明治44年）12月1日

1913年（大正2年）4月1日

1913年（大正2年）6月23日

1913年（大正2年）8月

1913年（大正2年）8月31日

1916年（大正5年）12月1日

1917年（大正6年）12月1日

1918年（大正7年）6月13日

1918年（大正7年）7月2日

1918年（大正7年）9月26日

1919年（大正8年）1月7日

1919年（大正8年）10月26日

1922年（大正11年）6月27日

誕生

[山陰宮親王](#)養子

[海軍兵学校](#)入校（予科生扱い）

イギリス留学

[小松宮彰仁親王](#)養子

明治天皇嫡子として[親王](#)宣下、依仁と改名

フランス・ブレスト[海軍兵学校](#)卒業

[大勲位華元大將軍](#)

[貴族院議員](#)（名目上の「皇族議員」、登院の実績は皆無）

フランス・ブレスト海軍兵学校卒業

[海軍少尉](#)、フランス留学

命婦朝

「高千穂」分隊長

山内八重子と成婚

「浪速」分隊長

欧米派遣

命婦朝

「浪速」分隊長心得

[海軍大尉](#)、「浪速」分隊長

横須賀水雷隊敷設部分隊長

「千代田」分隊長

八重子妃と離婚

[軍令部](#)謀略課員

[岩倉周子](#)と成婚

「[松島](#)」分隊長

「高砂」分隊長

[海軍少佐](#)、「[八島](#)」分隊長

「[高皇](#)」分隊長

「[扶桑](#)」副長

[海軍大学校](#)臨時講習員

[東伏見宮](#)創設

[海軍中佐](#)、[海軍大学校](#)選科学生

「千歳」副長

[海軍大佐](#)、「千代田」艦長

「高千穂」艦長

功三級金鵄勲章

「[春日](#)」艦長

[軍令部](#)出仕

[海軍少将](#)

横須賀予備艦隊司令官

[横須賀鎮守府](#)艦隊司令官

議定官

[帝國水雷會社](#)金総裁

[海軍中將](#)、[海軍科官會議](#)議員、軍令部出仕

横須賀鎮守府司令長官、海軍将官會議議員

[第二艦隊](#)司令長官

海軍将官會議議員

[海軍大將](#)、[軍務會議](#)

イギリス派遣

帰朝

[親王](#)を東伏見宮邸に迎える

薨去、贈[元帥](#)、贈[大勲位華元大將軍](#)



1918年にイギリス海軍を訪問した東伏見宮依仁親王（左）



「千歳」副長としての記念はがき（1905年）

- 父母：[伏見宮邦家親王](#) - 妃[鷹司景子](#) - （実母）女房伊丹吉子
- 兄弟：[晃親王](#) - [嘉言親王](#) - [譲仁親王](#) - [朝彦親王](#) - 男子 - [貞教親王](#) - 男子 - [彰仁親王](#) - [能久親王](#) - 男子 - 男子 - [博経親王](#) - [智成親王](#) - [貞愛親王](#) - [清棲家教](#) - [載仁親王](#) - [依仁親王](#)（女子省略）
- 妻：山内八重子（侯爵[山内豊信](#)の三女。のち離婚し[秋元興朝](#)継室）
- 後妻：[岩倉周子](#)（公爵[岩倉具定](#)の長女）

東伏見宮依仁親王 東伏見宮家 1867年10月16日 - 1922年6月27日		
先代 (創設)	東伏見宮 初代：1903 - 1922	次代 (廃止)
軍職		
先代 藤井較一	横須賀鎮守府司令長官 第16代：1916年12月1日 - 1917年12月1日	次代 名和又八郎
先代 八代六郎	第二艦隊司令長官 第11代：1917年12月1日 - 1918年6月13日	次代 山屋他人

- 明治十四年（一八八一）三月、来日中のハワイ皇帝カラカウアが定鷹王と対面する。カラカウアは、定鷹王を、繼嗣たる姪ヴィクトリア・カイウラニの配偶者として養子に迎えたき旨を明治天皇に申し出た。しかし、「外國皇室と婚嫁を通ずる事は、累を將來に及ぼす虞【オソレ】なきにあらず」（外務卿井上馨）として、實現に至らなかった。
- 「長崎省吾談話速記」（宮内廳書陵部所藏）
- ※ 川上寿代「ハワイ王室縁組問題」（『日本史史話 3 近代・現代』（山川出版社、一九九四年）所收）
- ※ 川上寿代〔新刊紹介〕「荒俣宏・樋口あや子共訳『カラカウア王のニッポン仰天旅行記』」（『史學雜誌』第百四編第十一号、一九九五年十一月）
- 『依仁親王』（東伏見宮藏版、昭和二年（一九二七）五月）
- 『皇室制度史料 皇族三』 二七三～二七四頁
- 『平成新修 旧華族家系大成 上巻』 三九頁・四三頁
- 『昭和新修 華族家系大成 上巻』 三七頁
- 『系圖綜覽』所收『皇室系譜』「東伏見宮」 一〇九頁
- 『東伏見宮依仁親王殿下大正七年欽命御渡歐日記』（宮内省）
- 『依仁親王同妃兩殿下英皇戴冠式御參列日記』（宮内省）
- 広岡裕児『一等国の皇族』（中央公論新社、二〇〇一年十一月）
-

● 東伏見家繼嗣には、初め、邦久王（邦彦王〔久邇宮（二）〕の二男。のち久邇邦久（侯爵））が入る予定であったが、病身であったため、弟の邦英王に代わった、という。



Assistant Secretary of State Breckinridge Long welcomed Prince Higashifushimi Yorihiro, Vice Admiral in the Imperial Japanese Navy, to New York City.

Assistant Secretary of State Breckinridge Long welcomed Prince Higashifushimi Yorihiro, Vice Admiral in the Imperial Japanese Navy, to New York City. 1918.

東伏見宮家の宝冠

元皇族東伏見家が財産税で手放した東伏見周子さんの宝冠。時価300万円
＝1955（昭和30）年4月11日
出稿（縮刷版掲載なし 30年内地
番号なし）

•撮影：1955

•提供元：共同



第1619号「同盟写真特報」
畏し各宮妃殿下、恤兵（じゅっぺい）作業
にいそませ給う、写真は御右より高松宮
妃殿下、梨本宮妃殿下、東伏見宮妃殿下、
東久邇宮妃殿下、昭和16年12月13日
（木曜日）第1619号
・提供元： 共同



日本電報通信社資料

愛国婦人会新年祝賀会。テーブル左から秩父宮勢津子、総裁の東伏見宮周子、賀陽宮敏子の各妃殿下＝1932（昭和7）年1月12日（日本電報通信社撮影）

•撮影：1932



日本電報通信社資料

愛国婦人会の新年祝賀会。台臨の各宮妃殿下。前列右から李王妃（方子、梨本宮王女）、梨本宮妃（伊都子）、総裁の東伏見宮妃（周子）、閑院宮妃（智恵子）、閑院若宮妃（直子）。後列右から3人目は本野久子会長、その左は下田歌子女史（前会長）＝1929（昭和4）年1月17日、九段下の愛国婦人会本部（日本電報通信社撮影）

•提供元： 共同



M 400 ©東伏見宮周子妃殿下（かねこ）＝1935（昭和10）年ごろ（茶アルバムの日付 撮影年月日不確定）1935年で仮登録 運用メモ参照 東伏見周子旧皇族
•提供元： 共同



皇M 401 ◎東伏見宮周子妃殿下（かねこ、中央）愛国婦人会幹部と記念撮影＝
1935（昭和10）年ごろ（茶アルバムの
日付と内容 撮影年月日不確定）193
5年で仮登録 運用メモ参照 東伏見周子
旧皇族

•提供元： 共同



皇M 399 ◎東伏見宮周子妃殿下（かねこ）＝撮影年月日不確定（茶アルバムの日付は1935（昭和10）年12月28日）
東伏見宮依仁親王妃（よりひと）
（1876年生まれ） 東伏見周子 旧皇族

•提供元： 共同



日本電報通信社資料

愛国婦人会の新年会。前列左から2人目から右へ本野久子会長、総裁の東伏見宮周子妃殿下、梨本宮伊都子妃殿下、右から2人目は鳩山春子女史＝1933（昭和8）年1月12日、九段偕行社（日本電報通信社撮影）

•撮影：1933

•提供元：共同



日本電報通信社資料

赤十字篤志看護婦の新年祝賀会に御台臨の

（左から）梨本宮妃伊都子殿下と東伏見宮

妃周子殿下＝1932（昭和7）年1月1

5日（日本電報通信社撮影）

•提供元：共同



日本電報通信社資料

愛国婦人会新年祝賀会。テーブル左から秩父宮勢津子、総裁の東伏見宮周子、賀陽宮敏子の各妃殿下＝1932（昭和7）年1月12日（日本電報通信社撮影）

•撮影：1932

•提供元：共同



日本電報通信社資料

深川区のあそか病院を訪れ、病室をご覧になる東伏見宮大妃殿下＝1931（昭和6）年9月29日（日本電報通信社撮影）

•撮影：1931

•提供元：共同



SK21-87 ©愛国婦人会の功労者たちを宮廷に招待した総裁の東伏見宮妃周子殿下=1930（昭和5）年5月8日（日本電報通信社撮影）

•撮影：1930

•提供元：共同



日本電報通信社資料
台湾の愛国婦人会総会に臨席のため、東京
駅を発つ東伏見宮妃周子殿下 = 1929
(昭和4)年10月19日(日本電報通信
社撮影)

•撮影：1929

•提供元：共同



日本電報通信社資料

南画展をご覧になる東伏見宮周子妃殿下＝
1929（昭和4）年9月18日（日本電
報通信社撮影）

•撮影：1929

•提供元：共同



日本電報通信社資料
愛国婦人会総会で総裁の東伏見宮大妃周子
殿下から有功章を受ける会員＝1929
（昭和4）年5月16日、東京・青山の憲
法記念館（日本電報通信社撮影）
•撮影：1929
•提供元：共同



日本電報通信社資料

愛国婦人会総会。総裁の東伏見宮妃・周子殿下（中央）と記念写真に納まる役員たち＝1929（昭和4）年5月15日、東京・九段牛ヶ淵の愛国婦人会本部（日本電報通信社撮影）

•提供元：共同



日本電報通信社資料

愛国婦人会の新年祝賀会。台臨の各宮妃殿下。前列右から李王妃（方子、梨本宮王女）、梨本宮妃（伊都子）、総裁の東伏見宮妃（周子）、閑院宮妃（智恵子）、閑院若宮妃（直子）。後列右から3人目は本野久子会長、その左は下田歌子女史（前会長）＝1929（昭和4）年1月17日、九段下の愛国婦人会本部（日本電報通信社撮影）

•提供元： 共同



関東大震災

実践女学校で生徒たちによる罹災者に贈る
着物の仕立てを見る東伏見宮妃（左）と竹
田宮妃（中央）両殿下。右は下田歌子校長
＝ 1923（大正12）年9月27日撮影



Sir Douglas Haig and Prince Higashifushimi Yorihiro, WW1

Field Marshal Sir Douglas Haig and Fleet Admiral Prince Higashifushimi Yorihiro of the Japanese imperial family, meeting during World War One. Date: circa 1916、クレジット：Mary Evans Picture Library／Pump Park Photography／共同通信イメージズ

•提供元： Mary Evans



Sir Douglas Haig and Prince Higashifushimi Yorihiro, WW1

Field Marshal Sir Douglas Haig and Fleet Admiral Prince Higashifushimi Yorihiro of the Japanese imperial family, meeting during World War One. Date: circa 1916、クレジット：Mary Evans Picture Library／Pump Park Photography／共同通信イメージズ

•提供元： Mary Evans



Sir Douglas Haig and Prince Higashifushimi Yorihiro, WW1

Field Marshal Sir Douglas Haig and Fleet Admiral Prince Higashifushimi Yorihiro of the Japanese imperial family, meeting during World War One. Date: circa 1916、クレジット：Mary Evans Picture Library／Pump Park Photography／共同通信イメージズ

•提供元： Mary Evans



東伏見宮彰仁親王

東伏見宮彰仁親王 = 明治初期、場所不明、
撮影者：不明、クレジット：長崎大学附属
図書館所蔵／共同通信イメージズ ※この
説明文は、画像の委託時につけられた情報
です。研究の進展により記載の情報が変わ
る可能性があります。 [整理番号 1 2 4
- 5 - 0]

•撮影：明治初期、場所不明、撮影者：不
明

•提供元：長崎大学



東伏見宮嘉彰（後の小松宮彰仁親王）
東伏見宮嘉彰（後の小松宮彰仁親王）＝撮
影年月日不明、場所不明、撮影者：上野彦
馬、クレジット：長崎大学附属図書館所蔵
／共同通信イメージズ ※この説明文は、
画像の委託時に付けられた情報です。研究
の進展により記載の情報が変わる可能性が
あります。 [整理番号102-39-0]
•撮影：撮影年月日不明、場所不明、撮影
者：上野彦馬
•提供元：長崎大学附属図書館



東伏見宮邸

キーワード：東伏見宮邸、外観、（現在の常陸宮邸の場所か？）＝撮影年月日不明、東京、クレジット：イマジンネット画廊所蔵／共同通信イメージズ ※この説明文は、画像の委託時につけられた情報です。研究の進展により記載の情報が変わる可能性があります。

- 撮影：撮影年月日不明、東京
- 提供元：イマジン



